

[B年]復活節第5主日(2022年5月15日)**【旧約聖書日課】出エジプト記 19章1~6節**

1イスラエルの人々は、エジプトの国を出て三月目のその日に、シナイの荒れ野に到着した。²彼らはレフィディムを出発して、シナイの荒れ野に着き、荒れ野に天幕を張った。イスラエルは、そこで、山に向かって宿営した。

³モーセが神のもとに登って行くと、山から主は彼に語りかけて言われた。

「ヤコブの家にこのように語り
イスラエルの人々に告げなさい。

4 あなたたちは見た

わたしがエジプト人にしたこと
また、あなたたちを驚の翼に乗せて
わたしのもとに連れて来たことを。

5 今、もしわたしの声に聞き従い

わたしの契約を守るならば
あなたたちはすべての民の間であって
わたしの宝となる。

世界はすべてわたしのものである。

6 あなたたちは、わたしにとって

祭司の王国、聖なる国民となる。
これが、イスラエルの人々に語るべき言葉である。」

【使徒書日課】ペトロの手紙一 2章1~10節

1だから、悪意、偽り、偽善、ねたみ、悪口をみな捨て去って、²生まれたばかりの乳飲み子のように、混じりけのない霊の乳を慕い求めなさい。これを飲んで成長し、救われるようになるためです。³あなたがたは、主が恵み深い方だということを味わいました。⁴この主のもとに来なさい。主は、人々からは見捨てられたのですが、神にとっては選ばれた、尊い、生きた石なのです。⁵あなたがた自身も生きた石として用いられ、霊的な家に造り上げられるようにしなさい。そして聖なる祭司となって神に喜ばれる霊的ないけにえを、イエス・キリストを通して献げなさい。⁶聖書にこう書いてあるからです。

「見よ、わたしは、選ばれた尊いかなめ石を、シオンに置く。

これを信じる者は、決して失望することはない。」

⁷従って、この石は、信じているあなたがたには掛けがえのないものですが、信じない者たちにとっては、

「家を建てる者の捨てた石、
これが隅の親石となった」

のであり、⁸また、

「つまずきの石、
妨げの岩」

なのです。彼らは御言葉を信じないのでつまずくのですが、実は、そうなるように以前から定められているのです。⁹しかし、あなたがたは、選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のものとなった民です。それは、あなたがたを暗闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった方の力ある業を、あなたがたが広く伝えるためなのです。¹⁰あなたがたは、

「かつては神の民ではなかったが、

今は神の民であり、

憐れみを受けなかったが、

今は憐れみを受けている」

のです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 15章1~11節

1「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。²わたしにつながっているが、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる。しかし、実を結ぶものはみな、いよいよ豊かに実を結ぶように手入れをなさる。³わたしの話した言葉によって、あなたがたは既に清くなっている。⁴わたしにつながっていないが、わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながっていないければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていないければ、実を結ぶことができない。⁵わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。⁶わたしにつながっていない人がいれば、枝のように外に投げ捨てられて枯れる。そして、集められ、火に投げ入れられて焼かれてしまう。⁷あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたの内にもあるならば、望むものを何でも願いなさい。そうすればかなえられる。⁸あなたがたが豊かに実を結び、わたしの弟子となるなら、それによって、わたしの父は栄光をお受けになる。⁹父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた。わたしの愛にとどまりなさい。¹⁰わたしが父の掟を守り、その愛にとどまっているように、あなたがたも、わたしの掟を守るなら、わたしの愛にとどまっていることになる。

¹¹これらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたの内にもあり、あなたがたの喜びが満たされるためである。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

出エジプト記 19章1～6節

1イスラエルの人々は、エジプトの地を出て、三度目の新月の日にシナイの荒れ野にやって来た。2彼らはレフィディムをたつてシナイの荒れ野に入り、その荒れ野で宿営した。イスラエルは、そこにある山の前に宿営した。3さて、モーセが神のもとに登って行くと、主が山から呼びかけられた。「ヤコブの家に言い、イスラエルの人々にこのように告げなさい。4『私がエジプト人にしたことと、あなたがたを鷲の翼の上に乗せ、私のもとに連れて来たことをあなたがたは見た。5それゆえ、今もし私の声に聞き従い、私の契約を守るならば、あなたがたはあらゆる民にまさって私の宝となる。全地は私のものだからである。6そしてあなたがたは、私にとって祭司の王国、聖なる国民となる。』これが、イスラエルの人々に語るべき言葉である。」

ペトロの手紙一 2章1～10節

1だから、一切の悪意、一切の偽り、偽善、妬み、一切の悪口を捨て去って、2生まれたばかりの乳飲み子のように、理に適った〔別訳→霊的な〕混じりけのない乳を慕い求めなさい。これによって成長し、救われるようになるためです。3あなたがたは、主が恵み深い方だということを知ったはずで、4主のもとに来なさい。主は、人々からは捨てられましたが、神によって選ばれた、尊い、生ける石です。5あなたがた自身も生ける石として、霊の家に造り上げられる〔直訳→建てられる〕ようにしなさい。聖なる祭司となって、神に喜んで受け入れられる霊のいけにえを、イエス・キリストを通して献げるためです。6聖書にこう書いてあるからです。

「見よ、私は選ばれた尊い隅の親石をシオンに置く。」

これを信じる者は、決して恥を受けることはない。」

7それゆえ、この石は、信じているあなたがたには掛けがえのないものですが、信じない者にとっては、

「家を建てる者の捨てた石
これが隅の親石となった」

のであり、8また、
「つまずきの石、

妨げの岩」

なのです。彼らがつまずくのは、御言葉に従わないからであって、そうなるように定められていたのです。9しかし、あなたがたは、選ばれた民、王の祭司、聖なる国民、神のものとなった民です。それは、あなたがたを闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった方の力ある顕現を、あなたがたが広く伝えるためです。10あなたがたは、

「かつては神の民ではなかったが

今は神の民であり

憐れみを受けなかったが、

今は憐れみを受けている」

のです。」

ヨハネによる福音書 15章1～11節

1「私はまことのぶどうの木、私の父は農夫である。2私につながっている枝で実を結ばないものはみな、父が取り除き、実を結ぶものはみな、もっと豊かに実を結ぶように手入れをなさる〔直訳→清くされる〕。3私が語った言葉によって、あなたがたはすでに清くなっている。4私につながって〔直訳→とどまって〕いなさい。私もあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながっていなければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、私につながっていなければ、実を結ぶことができない。5私はぶどうの木、あなたがたはその枝である。人が私につながっており、私もその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。私を離れては、あなたがたは何もできないからである。6私につながっていない人がいれば、枝のように投げ捨てられて枯れる。そして、集められ、火に投げ入れられて焼かれてしまう。7あなたがたが私につながっており、私の言葉があなたがたの内にとどまっているならば、望むものを何でも願いなさい。そうすればかなえられる。8あなたがたが豊かに実を結び、私の弟子となるなら、それによって、私の父は栄光をお受けになる。9父が私を愛されたように、私もあなたがたを愛した。私の愛にとどまりなさい。10私が父の戒めを守り、その愛にとどまっているように、あなたがたも、私の戒めを守るなら、私の愛にとどまっていることになる。」

11これらのことを話したのは、私の喜びがあなたがたの内に入り、あなたがたの喜びが満たされるためである。」

黙想のためのノート

次主日教会暦と聖書日課について

・5月15日「復活節第5主日」の日課主題は「神の民」。「復活節」の後半は、「昇天日」および「聖霊降臨日」を見据えた主題が取り上げられる。

・福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、「ぶどうの木のとえ」の箇所。旧約聖書日課は、「出エジプト記」から、エジプトを出た民がシナイ山で「律法」を受けられる状況設定場面の冒頭箇所。使徒書日課は、「ペトロの手紙一」から、旧約の「神の民・神の祭司」観を援用したキリスト者の自己理解が示される箇所。

旧約日課(出エジプト19章より)

・「出エジプト記」は、ユダヤ正典「律法」の第二に置かれ、「申命記」まで続く「モーセ物語」の最初に位置する。「モーセ物語」は、アブラハム・イサク・ヤコブを祖とする人々(ヘブライ人)がエジプトでの数百年の生活から離れ、神の「約束の地」で「神の民」として歩み始めるまでの備えを重ねる物語として描かれる。ここには、一見すると、アブラハムを祖とする「イスラエル民族」という血族集団の歴史が描かれているように見られるが、実際には、エジプトから導き出される集団を「ヘブライ人」(すなわち「さすらい人」の意)として描き始め、エジプトから離れる場面でも注意深くその集団には「そのほか、種々雑多な人々もこれに加わった」(出 12:38)と描写されるなど、純粋な血族集団であることを否定する場面は少なくない。結局、この集団が「神の民」としての「イスラエル」という枠組みを明確に与えられるのは、「シナイ契約」(出 19~24章)に拠るものとして示され、「モーセ物語」のみならず、「ヨシュア記」以降の「イスラエル正史物語」においても、この「シナイ契約」こそが一貫して「神の民としてのイスラエル」の枠組みとして提示されるのである。このような「契約の民」としての「イスラエル」の枠組みは、歴史上の民族集団としての「ユダ・イスラエル」という枠組みとの間に常に葛藤をもたらしてきたと考えられ、正典としての「旧約聖書」には、その葛藤の痕跡が随所に見られるのである。前6世紀末からの正典編纂(「律法と預言者」)以降、いわゆる「ユダヤ教」という枠組みが成立してからも、この葛藤が歴史的に起こってきたが、紀元70年にユダヤ戦争の結果としてエルサレム神殿が破壊されて以降、「ユダヤ教」の事実上の集団指導者となったラビたちは、この葛藤を事実上封印し、血統を「ユダヤ人としての十分条件」として扱うのみで、「必要条件」としては扱わなくなる。「ユダヤ人=ユダヤ教徒」としての「必要条件」は、あくまで「シナイ契約」に基づいた律法遵守(ユダヤ人としての生活規範の遵守)であることが明確にされ、それゆえに多くの異邦人が改宗者として「ユダヤ人=ユダヤ教徒」になる道が開かれたのである。

・日課箇所は、「シナイ契約」の「前文」とも言える箇所である。日付の設定から、この出来事は「過越し」から7週後に始まる出来事として解釈されてきた。

使徒書日課(Ⅰペトロ2章より)

・「ペトロの手紙一」は、使徒ペトロが「バビロン」在住時にシルワノの筆によって著し、小アジアからシリアにかけての諸教会に宛てた書簡。現代の聖書学者の中には、ペトロの真筆性について疑義を呈する者も多いが、歴史的には「ペトロの書簡」として教会に受け入れられてきた。本書簡の概論については、資料「聖書と祈りの会 220119」、「同 220202」、「同 220427」なども参照。

・本書簡は、キリスト信者の基本的な自己理解について教える内容となっており、伝統的に「洗礼教育」のテキストとして扱われてきた。日課箇所冒頭は、伝統的なラテン典礼で「復活節第2主日」の呼称「クアジ・モド・ゲニティ」にもなってきた聖句で、復活祭に洗礼を受けた新入信者が一週間の共同生活を経て「第2主日」を迎えたところで示されるべき聖句として位置づけられてきたと言われる。

・日課箇所は、旧約聖書からの引用・援用が集中的に置かれており、本書簡全体の中でも特異的な箇所である。6節←イザヤ 28:16、7節←詩 118:22、8節←イザヤ 8:14、9a節←イザヤ 43:20、9b節←出 19:6、9c節←イザヤ 43:21、10節←ホセア 2:1。これらの引用聖句の内、イザヤ 28:16、詩編 118:22、イザヤ 8:14、ホセア 2:1は新約の他の文書でも引用・援用されており、初代教会でキリスト信仰を基礎づける聖句として早くに位置づけられ、共有されていたものと考えられる。一方、「出エジプト記」からの引用も、「シナイ契約」(出 19~24章)を中心に、新約各文書で繰り返し見られる、「シナイ契約」を再解釈してキリスト信仰の中に明確に位置づけようと意図されたものと考えられる。なお、実際の引用は、「ギリシア語訳旧約聖書(七十人訳聖書)」に基づく推認される例が多く、初期キリスト教会の神学形成における傾向性を決定づけた可能性がある。

・日課箇所旧約「預言書」から多数引用していることから推認されるように、本書簡では、キリスト信者の自己理解として「神とこの世(の人々)を仲介する祭司の役割」を大きく据えていると言える。旧約の預言者は、基本的にすべて「祭司」の出自であり、元来は、王立神殿の祭司の中から宮廷に呼ばれて王の助言者としての役割を果たした「宮廷預言者」という地位にあった者たちのことであると考えられる。彼らは、神殿で祭司集団によって伝承・継承されてきた「神の言葉」の担い手として、王に「神の言葉」をもって助言し、また王宮祭儀を執行したのである。王に「神の言葉」を告げることは、王のもとにある世の民に告げることと同じである。このような旧約の「祭司=預言者」像を前提に、日課箇所は、キリスト者の役割を「王の系統を引く祭司(王の祭司)」として位置づけているのである。このような「祭司=預言者」像は、当初は「キリスト」に当てはめられていたであろうが、次第に「キリスト者」にも該当することとして明示化されていったのだろう。

福音書日課(ヨハネ 15 章より)

・日課箇所は、主イエスが十字架につけられる前の晩に弟子たちと最後の食事をした際に対話を通して語られた教えの一部として伝えられる「ぶどうの木のたとえ」。場面設定は、前段末尾に「さあ、立て、ここから出かけよう」(14:31)という呼びかけを置いており、食事の席から出て、「キドロンの谷の向こう」(18:1)にある「オリーブ山」を目指して歩き始めてからのことと解釈しうる。日課箇所の「たとえ」は、その道程でぶどう畑を通りかかった際に語られたのかもしれない。

・「ぶどうの木のたとえ」は、父である神が農夫であるところの「ぶどう園」という設定から始められている。旧約には、イスラエルを「神のぶどう園」にたとえる例がある(イザヤ 5 章など)。おそらく、日課箇所の「ぶどうの木のたとえ」は、旧約の「神のぶどう園」のモチーフを素材として、その中にイエス・キリストの役回りを描き込むことで、キリストを不可欠とする「イスラエル=神の民」を描出しようとしているのである。

・ヨハネ福音書は、「ぶどうの木のたとえ」のほかにも、10 章では「羊の群れ」のモチーフを旧約から援用することによって、イエス・キリストの存在を組み込んだ「神の民」のイメージを描いている。これらのモチーフは、共観福音書でも、異なる用い方ではあるが、援用されており、旧約の「神の民=イスラエル」の後継者を自認する初代教会にとって重要なモチーフであったと考えられる。

・「ぶどうの木のたとえ」は、ある程度のぶどう栽培の技術的な側面を前提として知った上で解釈することが求められる。ぶどうの木は、台木と呼ばれる根を張らせる株に、良い実を实らせる品種の枝を接いで、栽培される。また、実を豊かに結ばせるために、シーズンごとに幹から生える枝を大胆に落とす必要がある。また、伸びてきた枝も適宜剪定し、栄養を集中させることで、実りを大きくする。「たとえ」には、このような栽培上不可欠な農作業が描き込まれている。これらを踏まえて「たとえ」を解釈するとき、農夫(神)の意図がどこにあるのかを明確に読み取ることができるのである。

・繰り返し現れる「つながる」や「とどまる」は、いずれも原語は「メノー」で、「ヨハネ文書」に特徴的な用語である。神やキリストと弟子との関係を描いていく上で決まって用いられている。「メノー」の原義は「残る／続く」で、能動的な連結行為ではなく、現状を肯定して維持し続ける受動的な態度を指して用いられている。

来週の誕生日 (5 月 15 日～21 日)**主日礼拝の讃美歌から**

・21-226 番「輝く日を仰ぐとき」(= II 161)は、スウェーデンの伝道者ボーベリが作詞した歌詞をスウェーデン民謡の曲で歌うようになったもの。19 世紀終わりごろのスウェーデン語讃美歌集で発表された後、ドイツ語、ロシア語に訳されて歌われるようになって

いたものを、英国人宣教師がウクライナで聞いて英訳して紹介した。1950 年代にビリー・グラハムが伝道集会で用いるようになって有名になり、日本には中田羽後が紹介して広く歌われるようになった。

- ・こ-60 番「しゅイエスはまことのぶどうのき」は、1966 年版「こどもさんびか」編纂にあたっての公募に応えて豊島岡教会員・山田忠博が作詞・応募した歌詞に、さんびか委員であった作曲家の富岡正男が自作の曲をつけた。「こどもさんびか改訂版」(2002 年版)に継承された際、一部歌詞が変更されている。
- ・21-521 番「とらえたまえ、われらを」(= I 344「とらえたまえ、わが身を」)は、20 世紀米国長老派牧師 W.フォークスが作詞、同じく長老派牧師 C.ローファーが作曲。ローファーが 1918 年のある会議の最中に書いた曲にあわせて、フォークスが青少年向き讃美歌として作詞。日本語版は 1954 年『讃美歌』から。

21-226「輝く日を仰ぐとき」**O Store Gud**

English tr. by Stuart K. Hine

1. O Lord my God, When I in awesome wonder / Consider all
The works Thy Hand hath made, / I see the stars, I hear
the mighty thunder, / Thy pow'r throughout / The universe
displayed;

Refrain:

*Then sings my soul, / My Saviour God, to Thee, / How great
Thou art! How great Thou art!*

2. When through the woods / And forest glades I wander / I
hear the birds Sing sweetly in the trees; / When I look down
/ From lofty mountain grandeur / And hear the brook / And
feel the gentle breeze;
3. But when I think / That God, his Son not sparing, / Sent Him
to die, I scarce can take it in, / That on the cross My burden
gladly bearing / He bled and died To take away my sin;
4. When Christ shall come, / With shouts of acclamation, / And
take me home, / What joy shall fill my heart! / Then I shall
bow In humble adoration / And there proclaim, / "My God,
how great Thou art!"

21-521「とらえたまえ、われらを」**Take Thou Our Minds, Dear Lord**

1. Take Thou our minds, dear Lord, we humbly pray, / Give
us the mind of Christ each passing day; / Teach us to know
the truth that sets us free; / Grant us in all our thoughts to
honor Thee.
2. Take Thou our hearts, O Christ, they are Thine own; /
Come Thou within our souls and claim Thy throne; / Help
us to shed abroad Thy deathless love; / Use us to make
the earth like heaven above.
3. Take Thou our wills, Most High! Hold Thou full sway; / Have
in our inmost souls Thy perfect way; / Guard Thou each
sacred hour from selfish ease; / Guide Thou our ordered
lives as Thou dost please.
4. Take Thou ourselves, O Lord, heart, mind, and will; /
Through our surrendered souls Thy plans fulfill. / We yield
ourselves to Thee—time, talents, all; / We hear, and
henceforth heed, Thy sovereign call.